

2023（令和5）年度市政懇談会 開催結果概要

- 日 時 令和5年7月18日（火）午後6時00分～
- 会 場 音別町コミュニティセンター 研修室1・2・3
- 出席者 13人

〔市長より説明（別途資料参照）〕

- （1）釧路市の防災の取り組みについて
- （2）市立釧路総合病院の新棟建設事業等の進捗について
- （3）都心部まちづくりについて

●質疑応答

【参加者A】

釧路市の防災の取り組みについて、公助の部分は避難場所の確保をメインにお話しされていましたが、それによろしいでしょうか。

【市長】

公助の部分では、一時避難場所の確保を最優先すること、避難困難地域を無くすことを最優先に取り組んでおり、この後、避難所の運営などを進めていくという考えです。

【参加者A】

発生から48時間はどこからも支援されないとのことですが、その間私たちは何をしたらいいのかという事です。音別町の場合ですと、行政センターの方は、多くが釧路から通われているという現実です。災害発生48時間は動けないことは事実で良いと思いますが、この土地を考えたときには、その辺はどうなっていますか。きっと48時間以上になると思います。

【市長】

津波の場合では、津波が発生して大体8時間ぐらいで水が引きます。その時にどのような状況になるのかという事です。例えば、道路が使える、使えないなどがあります。自衛隊や地元の建設会社のサポート等を使いながら進めていくと思いますが、時間は早くしていきたいと思っております。48時間公助が存在しないということは、逆にその間の準備が必要になります。例えば薬は日頃から準備して頂きたいですし、後は水と食料があれば48時間頑張っただけというようなことをお願いしたいと思っております。そこから先、避難所などを活用してもらいたいという考え方です。

【参加者A】

音別町は離れています。そうすると食料などは備蓄されているのですか。

【市長】

備蓄というのは命を助けるために行いますので、避難する高い場所に備蓄をする形になります。しかしながら、釧路市内で153か所一時避難場所がありますが、全部出来るのかと言われれば民間施設もありますので出来ません。その間の備蓄はもちろんしていますが、初めの48時間は全てのことが動かないと考えて頂ければありがたいです。

【参加者A】

そうすると、医療も動かないのですね。

【市長】

そうなります。

【参加者B】

1つ提案があります。最大20メートルの津波が来たら、行政センターは使い物にならないと思います。音別には「こころみ」という施設がありますが、そこを災害時に使えるような施設に整備してはどうでしょうか。発電施設や通信施設、情報センターを整備してはどうですか。水道も使えますし、暖房も薪ストーブですので、灯油がなくなってもマイナス20度の気温でも生きていけます。

「こころみ」の展望施設があり、望遠鏡があります。ホテル関係の企業に「星野リゾート」がありますが、星の見えるホテルとして活用していただき、実質として防災施設になるような施設を建設していただきたい。近くでも温泉が出ていますので出ると思います。星が見えるホテルはほとんどありませんので、道内唯一の星の見えるホテルとして市長から社長を説得いただきたい。防災施設ですので、国からも補助が出ると思いますので、手腕を使っ

【市長】

避難場所は一時避難と避難場所は分かれています。一時避難というのは命を救うための高さのあるところとなります。避難するには、歩いて避難することが大前提となっていて、当初は直径1キロぐらいを想定して設定していました。その後、国の中央防災会議が示した凍結路面の避難速度などを踏まえて、命を守る施設を確保していこうという形で行っています。その後津波が来て引いていった場合に、そのところが使えるという事は全く考えておりません。ノーマルに使えるものとはなり得ないと思っています。そのうえで避難所というものは、その場所ではなく、津波の来ない所で避難所というものを確保する必要がありますし、そこにどうやって移動するかというところで、公助として自衛隊や警察等が入っていき、避難所の運営になると考えています。ですから音別行政センターは一時避難は出来ませんが、避難所という事であれば、中々使用は出来ないのかなと思っています。

【参加者B】

冬季間の48時間頑張れと言われても、マイナス20度の世界で48時間持ちません。

【市長】

屋上は無理だと思っています。音別行政センターの場合は、7.6メートルの津波の想定ですので、3階から使えて屋上も使えるのですが、冬の屋上は大変だと言うことはおっしゃる通りだと思います。

【参加者B】

一時避難所ですから、避難所ではないです。それを「こころみ」に避難所を作っていただければと思っています。

【防災危機管理課】

例えば拓北会館は浸水しない場所となっております。

【参加者B】

「こころみ」の整備状況に関して、暖房に関しては心もとない所がありま

す。普段から使っていないと、避難所として運営できないと思います。ですから、あそこを民間にホテルとして運営していただき、緊急の時には避難所として使えるように、例えば200～300人寝泊りできるようにすれば、行政としてもかなり負担は少なくなると思います。

【市長】

避難所というのは浸水エリア外に確保していかなければならない中で、「ころみ」などが入っているところであります。

先ほど話しました通り、目標はゼロですが、10年間で8割死者数を減らしていくため進めているところであり、まずは、一時避難で命を救うことを真っ先に取り組んでいます。次年度に向けては、どのような避難所を進めていくか、全体を見ていきながらしっかり議論していき、次は何をするのかという事を決めて進めていくこととなりますので、その中でころみの状況等考えていきながら、対応策というのを構築していきたいと考えています。暖房については、こういった暖房器具が運ばれてくるのかなど現実的に考え、避難所の対応をしっかり考えていきたいと思っています。

【参加者B】

音別の街で、全国的に有名なものは「道東スーパー林道」になります。バイクに乗る人には神聖な林道です。それが今通れません。体験型の旅行を進めるのであれば復活していただきたい。二俣にホテルができれば地域振興になります。是非北海道に働きかけをお願いします。

【市長】

事業自体が無くなっていると思いついていましたが、産業においては、色々な事業が継続する仕組みで、国においても作られてくるものでありますが、スポット的な政策というものもあります。それがまさしく「スーパー林道」でありました。ある意味産業構造を強くしていくためのものであり、林道というものは山を整備するのに必要なものでしたが、国の様々な要因からぱったり止まってしまったと思います。ですから、そういったものを活用して北海道とか、自治体が様々な事業展開しているものです。「スーパー林道」を復活させることはどういう方法があるのかとは思いますが、しかしながら、地域の特性をどう活かすのか、どうやって資源活用していくのかというのは、重要なことだと思っています。実際釧路も、バイクのオフロードの大会が年1回でしたが、今年から年2回の開催を頂きます。そういったものをどう組み込んでいくのかは考えながら進めていきたいと思っていますので、情報をつかみながら、資源を活かせるのか研究していく必要はあると思います。

【参加者C】

津波災害はいつ発生するのかわからないため緊急的ですが、この町自体の構造やいく末を考えますと、4月末現在で人口が1551名です。毎年コンスタントに50人ぐらい減っている状況です。あと30年もすれば、極端な話をすれば町全体が無くなります。大塚製菓が残りますので、交流人口は当然残ると思いますが。その中でこの度、予算1,230万円で地域おこし隊1名増員の2名体制になりますが、行政と一般市民で、定期的に座談会を組んだ方が良いのではないかと思います。

また、グループホームは議会だよりで、2月末で廃止と書いてありましたが、代替性のある組織なり運営が必要です。特に団塊の世代を考えたあと15年はグループホームに準じた機能や役割が期待されます。私は72歳ですが、利害関係者のような気持ちで喋っています。これまでの紆余曲折がありました。私が3月30日に行政センター長と話した中で、私はNPOを作りたいと思っていたけれども、それは行政として協力できませんと言われました。それに腹が立ち不貞腐れて帰りましたが、地元の音別学園に障がい者も含めて少し適用できるように、定員は9名ですので限りはありますが認知症以外の障がい者についての窓口を広めていただきたい。いずれにしても高齢者を優先的に措置してもらうことと、予算3,500万円ぐらい毎年積み立てていたと思いますので、少なくとも10年~15年継続していただきたい。本来条例では設置せよと言っている中で、予算は組み入れしないということに、私も怒って北海道新聞の記者と相談して、行政訴訟を少し段取りしていました。その中で、条例が廃止されました。どこまでの覚悟を持って条例廃止したのかお聞かせください。

【市長】

座談会については、「おんぽ一と」オープンの時に「やります」と言っておきながら、実現できていないことに関しては大変申し訳なく思っております。様々ご意見をいただきながら、どのように進めていくのかについての考え方が大事であり、それについては私が説明することが適切であると思っております。そういった場の数が少ないことは申し訳なく思っており、数を増やしていきたいと思っております。

2点目の高齢者の施策につきましては、人口減少や高齢化社会の中で、どのような機能をそれぞれの地域の中に持っていくかという事があります。先ほど言いました市立病院についても、医療というものを持つことによって地域で安心して生活できるようになってくるものになります。こういったものを持っていかなければならないと思っております。ただそういった状況の中で、今まであったものをいつまでもしっかり確保することが務めであろうという考え方もあると思っておりますけれども、しかし様々な環境の中で変わってくるということはお理解いただけると思っております。

高齢者のグループホームにつきましては、運営いただいていた所からもう運営できないという話があり、その中で何とか受けていただくところはないだろうかと行政センターも動いてきた所があります。予算計上については受ける場所が出てきた場合には、復活していくものでありますので、どうしても受ける場所がない中で、まさに障害のある方々の生活を充実させるためにその場所を使っていきたいというお声をいただきました。市としてもその方針を進めていき、議会にも示しながら進めていったところですので、高齢者の施策はしっかり行っていかなければならないと思っております。ただそれは未来永劫あるのかではなく、様々な機能をどうやって町全体の中で持つてくるのかと考えているところです。

【参加者A】

防災の取組の中で、避難所の話が出てきました。その時は仮設の診療所は出来るのでしょうか。私は奥尻の災害の時に救援で行っていました。現場の

悲惨さは実際に見ています。その中には、急性期や慢性期の患者、薬を飲み続けている患者などがいます。私がいた避難所には仮設の診療所が設けられていました。そういった案があるのかお聞かせください。

【市長】

大事な話でありますので、そういったことを色々教えていただきたいと思っています。机上の考えがリアルな現場で出来なかったわけですので、我々が現場で真剣に考えてくしかありません。誰かが言ったからといって責任をとれるわけではありません。実際に地域内で議論をしっかりとしていかなければならない所であります。仮設を作ることは時間がかかりますし、どういったことができるのか地域の中で考えていく必要があります。避難所の運営については、国の中央防災会議に私も参加し、10回にわたり様々議論をし、思いがけないこともたくさん伺いました。あわせて、防災士の方々との意見交換の時に、「私は逃げない」という方がたくさんいると伺いました。「私が逃げると避難所にいる人に迷惑をかけるから逃げない」という話でした。避難率を高めていくには、避難しても大丈夫と言える状況を作ることが大事だと思います。100は出来ないかもしれませんが、40から始めて80まで持ってくるよう、いろいろな方の話を聞いて進めていくしかないです。初めから100%の物が出来るとは思っていません。ですから先ほども言った通り公助の限界についてもしっかり言うべきだと思っています。併せまして先ほど言いましたように、まずは一時避難の場所の確保を進めており、次の一般的な避難所の運営についてはまだこれから始まるころでございます。是非見てきたことを教えていただき活かしていきながら、現実的な対応策というものに繋げていきたいと思っております。

【参加者B】

市立病院について、災害の時に3日間確保するとのことですが、トイレの問題はどうするのか教えてください。

【市立釧路総合病院事務部長】

トイレにつきましては、防災グッズにあるような簡易トイレを確保しています。

【参加者B】

人数的にはかなりの数が必要になると思います。

【市立釧路総合病院事務部長】

水についても、飲料水の他に、トイレや透析の部分についても、3日分は新棟になった際は必ず確保してますし、トイレについても先ほど私が申したような、トイレとして使えるグッズも用意しております。今ここで何個という話は出来ないのですが、準備はしています。

【参加者B】

トイレ研究所というところで、防災についてのトイレの情報を公開しており、少し勉強しました。吸水ポリマーが入った携帯トイレの作成方法を開発しました。トイレは1日1人あたり5回行きます。500人入院していると凝固剤だけでも膨大な数になります。固まった尿をポリバケツに入れて運び出すだけでも非常に難しいと思います。処理も焼却するか埋設するしかありません。トイレの問題は非常に難しいです。

あと稼働率について、私は日赤病院に20年ほどいましたが、93%というのはすごい稼働率です。90%になると専門病棟に専門外の患者が入ってきますので、医者や看護師が大変になります。どのような管理を考えているのですか。

【市立釧路総合病院事務部長】

新棟に向けては病棟を決めないでという形が全国的には進んでおります。今現在も大体は決まっていますが、各病棟でまたがって、患者には入っていないというのが現状です。看護師の方も確におっしゃるとおり、内科しか入院患者を受け入れたことがないという看護師もおりますので、全ての診療科に対応できるようにトレーニングをした中で、患者さんに確かな治療を提供できるように、当院の方は準備進めていますし、今現在もそういう方法で進んでおります。

【参加者B】

ドクターにすごい負担がかかります。入院患者のために各階に行かなければなりません。せめて93%ではなく88%ぐらいになるように予算付けして頂くと、お勤めの皆様も胸を撫で下ろすのではないのでしょうか。

【市長】

ここは予算とは違う話です。利活用の話の中で、個室を増やしていくことによって、93%が目指せますので、今までよりも多くの入院患者が入れるということです。単純にベッド数を減らした中で、逆に病院機能が落ちたと思われることがありますから、稼働率がこれだけ上げられるといった中で計算しているものです。

【参加者B】

93%という数字にビックリしまして、あと急患が入らなくなりますよね。90%ぐらいじゃないと急患は入らないです。

【市長】

救急病棟は16床を新規に確保します。病院機能は市民の方のためということもありますが、医師も働きやすい形も重要だと思っていて、先生方ともしっかりと話しながら進めていきたいと思っています。市立病院は他の地方センター病院よりも医師が少ない状況の中で、しっかりとした機能を維持していただいていることは、先生方のご助力によるところでありますので、新棟建設の際は働きやすい形とし、医師確保にもつなげていきたいと思っていますので、しっかりと進めていきたいと考えております。

【参加者B】

精神科の問題ですが、ドクターの全体的な数が少なくなっていることと、病棟運営がはっきり言って赤字になっています。ではどうするのかという話ですが、精神発達障害や社会適応障害の方が結構いまして、そういった方が精神科に行っています。そういった方を受け入れる施設を増やすことによって、市内の精神科医の先生方も負担が減ると思います。精神科を作るとは無理ですので、入所施設や通所施設を市内にあと1つでも作って頂くと医療的にも患者的にも助かると思います。

【市長】

新規は4か月待たなければいけない状況であり、非常に苦慮している所です。北海道の医療体制を確保いただいている3つの医育大学や民間も

含めた総合病院と連携をとっていきながら医療体制を維持してきましたが、突発的な状況という中で、この精神科の問題が非常に課題になっています。今北海道にもご相談している所でありまして、開院は中々難しいと思えますけれども、医師をスポット的にでも確保していく手法等を相談している所があります。併せて、総合病院に加え、民間の先生のお力も頂いていると思っており、その中で医療体制をどう確保していくのかということも相談しながら進めていくことが重要であると考えています。当面は、新規は4か月待たなければいけない状況の対応策を色々と相談している所でございます。その後、どのような形の体制をとっていくのかしつかり相談していくことを考えています。突発的な出来事にはなかなか対応が出来ない状況です。新患の場合は1人1時間ぐらい診察にかかる状況という事ですので、1日に何人の患者を診られるのかという議論と重なってくる状況です。まずは医師確保を進めていきながら、次の行程を考えていくことになるかと受け止めています。